様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：５１４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１００３

研究課題名（和文）帝国大学における研究者の知的基盤に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A basic study of a intellecutual foundation of researcher in the Imperial University

研究代表者
吉葉　恭行（yoshiba, yasuyuki）

秋田工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：５０４３６１７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　東北帝国大学が主であるが、帝国大学の主要な研究者たちの個人文書や論文・随筆・啓蒙書などの著作物の網羅的な調査を実施し、その結果をデータベース化することができた。この成果は整理したのちに公開したいと考えている。また前述のデータベースをもとに戦前期・戦中期の帝国大学の研究者の思考やその源である知的基盤を明らかにするための個人文書や著作物の分析に着手することができた。それらの成果の一部は、著書や論文、学会等において報告している。
　本研究課題の成果をもとにした新たな共同研究の枠組みがすでに構築されているので、今後は個別研究結果の総体的考察を通して、帝国大学の本質を明らかにしていくつもりである。

研究成果の概要（英文）：We've investigated comprehensively researchers' personal document and work of a thesis, an essay and an enlightenment handwriting of Imperial University, as a mainly Tohoku Imperial University. We'd like to open a data base of survey result after putting this outcome in order.An above-mentioned data base, and, We've initiated the analysis to make the intellectual foundation which are researchers' consideration and the origin clear. The part of those outcomes is being reported in works, theses and academic meetings, etc..
 A structure of new joint research based on an outcome of this research task is built already, so the real nature of Imperial University will be made clear through general consideration of an individual research result from now on.

研究分野：科学史・技術史

キーワード：教育史　大学史　科学史　思想史

１．研究開始当初の背景

戦時下の科学技術政策とその実施に伴い形成された帝国大学の研究体制は、戦後の科学技術政策と大学の研究・教育のあり方に多大な影響を及ぼしたことは想像に難くない。

しかしながら、西山伸氏が指摘するように、戦時下の大学において行われた実際の研究・教育のあり方は、ほとんど明らかにされていない（西山伸「大学沿革史の課題と展望」『日本教育史研究』26、2007）。

これまで理工系や医学系における大学と戦争のかかわりについてのいくつかの事例研究はあったが、個別・断片的なものであった。また近年では、戦時下に設立された技術院所轄の研究隣組や文部省所轄の学術研究会議研究班についての研究が進展したが、それらの研究は、全国の研究機関横断的な共同研究組織体形成の契機としてとらえたものであり、帝国大学内に組織された研究組織や具体的な研究内容は明らかにされていない（青木洋「第二次世界大戦中の科学動員と学術研究会議の研究班」『社会経済史学』72(3)、2006 など）。

文科系の学問統制や動員について包括的研究を試みた労作もあるが、主として日本諸学振興委員会における議論や報告書について検討したものであり、各帝国大学内の研究組織や具体的な研究内容について検討したものではなかった（駒込武ほか編『戦時下の学問の統制と動員』2011）。

このように、戦争と大学とのかかわりに関する研究は進展しつつあるが、各帝国大学における個別具体的な研究組織の形成や、実施された研究については明らかにされていない。ましてや、国策としての戦争に様々な形で協力した帝国大学の研究者たちが、いかなる思考や意図のもとで戦時研究に携わり、研究体制の形成に関与してきたのか、などの研究者の意識構造にせまる研究にいたっては皆無に等しい。

研究組織体としての帝国大学の本質を見定めるためには、組織体のみならず、組織体の構成要素である各研究者の思考やその源である知的基盤を明らかにし、それらを総体的に検討する必要があろう。なお本研究では、各研究者の専門分野における知識・認識の体系のみならず、専門分野外の知識・認識の体系をも含む概念を「知的基盤」と定義している。

近年、大学史研究は進展しつつあるが、戦時下の研究・教育に関する調査・研究は、教育史の分野のみならず、科学史の分野においても課題として残されていた。報告者等は、このような問題意識のもと、大学における研究・教育体制と科学技術政策との関わり方について歴史的に検討する必要があると考え、平成 17 年より東北大学史料館所蔵資料の調査・研究を開始し、戦時下に実施された大学院特別研究生制度を手掛かりとして、日本の科学技術政策と大学の教育・研究体制の形成過程について明らかにしてきた。

その後、平成 22 年より科学研究費補助金「戦時下の帝国大学における研究体制の形成過程とその実態に関する研究」（基盤 C、研究課題番号：22530809）を得て共同による調査・研究が進展し、旧帝国大学所蔵資料の調査・収集を実施し、大学院特別研究制度や学術会議研究班などを事例として、戦時下の科学技術政策の変遷と帝国大学における研究体制の形成過程とその実態について明らかにし、教育史・科学史・思想史などの多面的視点から包括的に検討を行ってきた。この研究により、国策による資金的・組織的な科学技術動員と、それによる帝国大学内の研究組織の形成過程は明らかになりつつある。

また報告者等は、この調査・研究の過程において、数多くの帝国大学の研究者たちの個人文書、随筆や啓蒙書などの著作物に接することができた。そしてこれらの個人文書や著作物を分析することにより、帝国大学の研究者たちの思考やその源となる知的基盤を明らかにできるのではないかという着想に至った。帝国大学の研究者たちの個人文書や著作物に網羅的に検討を加えることにより、研究者たちの思考や意図のみならず、彼らの思考の源としての知的基盤が明らかにされるのではと考えたのである。

また研究組織体としての帝国大学の構成要素である、個々の研究者たちの思考や意図、知的基盤を明らかにし、総体的に検討することにより、研究組織体としての帝国大学の本質が明らかになるのではないかという着想に至ったのである。

２．研究の目的

本研究の目指す最終の目的は、戦前期・戦中期において、国策としての戦争に様々な形で協力してきた研究組織体としての帝国大学の本質を明らかにすることにある。そのために、教育史、科学史、日本史、日本思想史といった異分野の研究者たちの共同研究により、帝国大学の研究者たちの個人文書や著作物を多面的に分析し、彼らの思考やその源となる知的基盤を明らかにし、それらを総体的に検討することとする。

本研究の段階では、まずそのための基礎調査として、帝国大学の研究者たちの個人文書や著作物に関する網羅的な調査を実施し、その調査結果をデータベース化し、それらを他の研究者らと共有しつつ研究に着手することを当面の目的とした。

３．研究の方法

本研究では、まず帝国大学の研究者たちの

個人文書や論文・随筆・啓蒙書などの著作物を可能な限り網羅的に調査し、その結果のデータベース化を進める。

つづいて、戦前期・戦中期の各帝国大学・研究分野における主要な研究者について、個人文書や著作物の分析により、彼らの思考やその源である知的基盤を明らかにする。

そして明らかにされた帝国大学の研究者の思考・知的基盤について、教育史、科学史、思想史といった多面的な観点から考察を加え、それらを研究組織体としての大学のなかに総体化させることにより、総体としての研究者たちが、戦前期・戦中期の帝国大学の教育・研究や研究体制の形成過程においていかなる役割を果たしたのか考察を加える。くわえて、研究組織体としての帝国大学の本質を明らかにして行く。

４．研究成果

本研究では、東北帝国大学を主として、帝国大学の主要な研究者たちの個人文書や論文・随筆・啓蒙書などの著作物を可能な限り網羅的に調査しデータベース化することができた。これにより、今後の研究、つまり戦前期・戦中期の各帝国大学・研究分野における主要な研究者の思考やその源である知的基盤を明らかにするという研究の発展につながる基礎を構築することができた。

また一部分ではあるが、上述のデータベースを活用し、戦前期・戦中期の各帝国大学・研究分野における主要な研究者について、個人文書や著作物の分析にも着手することができた。これらの研究成果の一部は、著書や論文、学会等において報告されている。

当初の目的である個別の研究者に関する研究が十分になされたとはいえないが、今後、深化させていくための素地と新たな研究枠組みは構築されたので、継続的に研究を展開していく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７件）

①本村昌文、村岡典嗣「Plato ノ Staat ノ研究」に関する一考察、岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要、41、2016、pp.27-42.

②谷本宗生、書評：舘昭著『東京帝国大学の真実』、日本教育学会『教育学研究』82-4、2015、pp.85-87.

③谷本宗生、帝国大学成立期の再考のための年報　資料の翻訳、東京大学史紀要、33、2015、pp.93-114.

④吉葉恭行、戦時下の学術研究会議研究班と東北帝国大学—『昭和二十年度／研究班組織原簿』の分析を中心に—、東北大学史料館紀要、9、2014、pp.60-73.

⑤永田英明、東北帝国大学における女子学生・女性研究者、東北大学史料館紀要、9、2014、pp.1-20.

⑥谷本宗生、東京大学予備門・第一高等中学校の学校医（摂生室医員）の存在について、一八八〇年代教育史研究年報、5、2013、pp.109-120.

⑦本村昌文、村岡典嗣『日本思想史研究』、岩波講座日本の思想、1、2013、pp.282-292.

〔学会発表〕（計　８件）

①谷本宗生、1880 年代における第一高等中学校・帝国大学の衛生活動、二松学舎大学テーブル・スピーチ（二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業局）講師として（二松学舎大学 1 号館 1103 会議室）2016 年 3 月 22 日

②吉葉恭行、秋田鉱山専門学校史研究の現状と課題、秋田大学史学会近世近代史部会第 76 回研究会、秋田大学、2016 年 3 月 13 日

③谷本宗生、子規と帝国大学、坂の上の雲ミュージアム第 10 回企画展ラジオシンポジウム（坂の上の雲ミュージアム・南海放送）パネリストとして（坂の上の雲ミュージアム 2 階ホール）2016 年 3 月 6 日

④吉葉恭行、戦時下の科学技術動員と帝国大学の学生たち－東北帝国大学の事例を中心に—、旧制高等学校記念館　第 20 回夏期教育セミナー、2015 年 8 月 23 日、旧制高等学校記念館

⑤永田英明、東北帝国大学の学徒勤労動員－「学徒勤労令」下の理工系学生の動員、大学アーカイブズセミナー、2015 年 7 月 22 日、東北大学史料館

⑥吉葉恭行、秋田鉱山専門学校の中国人留学生、日中二国間学術交流セミナー「日中留学生研究の現状と課題」、南開大学日本研究所（中国天津市）2014 年 11 月 2 日

⑦永田英明、帝国大学と中国人留学生—東北帝国大学を中心に—、日中二国間学術交流セミナー「日中留学生研究の現状と課題」、北京日本学研究センター（中国北京市）2014 年 11 月 1 日

⑧本村昌文、日本における「老年学史」の研究・序説、蘭州大学日本語・日本文化研究会、蘭州大学（中国蘭州市）、2014 年 9 月 18 日

〔図書〕（計　１件）

①吉葉恭行、戦時下の帝国大学における研究体制の形成過程—科学技術動員と大学院特別研究生制度　東北帝国大学を事例として—、東北大学出版、2015.

６．研究組織

(1)研究代表者

吉葉　恭行（YOSHIBA, Yasuyuki）

秋田工業高等専門学校・人文科学系・教授

研究者番号：５０４３６１７７

(2)研究分担者

永田　英明（NAGATA, Hideaki）
東北大学・学術資源研究公開センター・准教授
研究者番号：２０２９２１８８

本村　昌文（MOTOMURA, Masafumi）
岡山大学・社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：８０３２２９７３

谷本　宗生（TANIMOTO, Muneo）
大東文化大学・東洋研究所・特任准教授
研究者番号：９０３０１１９２

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：